

英検取得級は高校3年間の学業成績と 学力試験にどのように影響を与えるのか

兵庫県／神戸学院大学附属高等学校 教諭 船越 貴美

概要

高校3年間の学業成績は定期考査の素点だけでなく、課題や宿題の提出や授業参加度などを考慮して決められている。客観的なテストの点数だけでなく、担当教員の主観的な見解が学業成績には含まれているのである。一方で、英語検定試験や模擬試験、GTECのような資格試験や全国規模の学力試験は、受験者の知識や能力を客観的な数値として相対的に評価している。本研究では、高校3年間の学業成績と学力試験の成績を時系列的に比較し、英検取得級が両方の成績にどの程度影響を与えているかを分析し、検証した。英検取得級が成績を向上させている1つの要因と仮定して、3年間で英検の取得級が高くなるほど学業成績と学力試験の両方の成績が向上するという仮説を立てた。調査には私立高等学校生188名の成績データを使用し、高校卒業までに取得した英検最終取得級と各学年末の評点および模擬試験の結果を共分散構造分析の手法を用いて、縦断的モデル、成長曲線モデル、潜在構造分析の3つの手法で分析した。結果は、英検取得級が学業成績や学力試験の成績にそれほど大きな影響を与えているという知見は認められなかったが、学業成績と模擬試験の両方の成績を3年間で向上している生徒は、高校2年生の後半から3年生の前半で英検取得級を高くした生徒であり、大学入試に対する学習の動機づけが非常に高い生徒であるということがわかった。

1 はじめに

財団法人日本英語検定協会が実施している英語検

定試験（以下、英検と記す）は日本人学習者の英語力を測定するテストとして、小学生から成人まで幅広い年齢層に認知されている。英検の取得級が高校入試や大学入試、ひいては就職試験にまで優遇制度を設けているので、より高い級を取得しようと受験者数は増加している。確かに、高校卒業時までに英検2級を取得した生徒は、大学入試に対応できる英語力を身につけており、英検のための学習は総合的な英語力を高めるために有効な学習であると考えられる。英検の学習にはリスニングやスピーキングの能力も必要となるので、文法や読解問題だけを学習している受験者よりも、英語の4技能をよりバランスよく身につけていると考えられる。

英検2級取得者が国公立大学や難関私立大学に入学している傾向があることから、英語力が大学受験とかわりがあることが示唆される。高校在学中に英検2級を取得した生徒は、高校3年間でどのように英語力を伸ばしているのだろうか。高校在学中に英語の学業成績を伸ばし、なおかつ模擬試験や大学入試のような学力テストでも良い結果を出しているのだろうか。英検取得級によって学校の成績も向上し、学力テストでもその成果を見ることができれば、英検2級取得を目標に英語を学習する指針を与えることができる。

本研究では、英検取得級がどのように高校3年間の英語の学業成績に影響を与え、模擬試験で良い結果をもたらすかを時系列的に分析し、どのような生徒が3年間で学力を向上させているのかを検証した。

2 英語力と学業成績

高校卒業までに必要な英語力とはどのような力であろうか。文部科学省（2012a）は平成15年に『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』を策定し、中学校卒業段階で英検3級を、高等学校卒業段階で英検準2級から2級を達成目標として掲げている。また平成23年7月には、「外国語能力の向上に関する検討会」を設置し、「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」（文部科学省、2012b）を公表している。その中でも、学習指導要領に基づき達成される英語力として、中学卒業段階で英検3級を、高校卒業段階で英検準2級から2級を生徒に求められる英語力として掲げている。つまり、高校卒業時まで英検準2級から2級を取得することが、達成すべき英語力であると明示しているのである。

英検は「1963年に創設されて以来、延べ8,300万人が受験し、現在は年間約230万人が受験している国内最大規模の英語検定試験」（日本英語検定協会、2012）である。高校や大学入試、就職試験などに優遇されるというメリットがある。日本英語検定協会が指標として掲げている各級の目安は、英検3級が中学卒業程度、英検2級が高校卒業程度となっているので、中学や高校在学中に英検3級や2級を取得することは個人の英語力の水準を証明することになる。そのため、多くの学校で中学校では英検3級を、高校では英検2級を目標に日々の授業と並行して英語力向上を目的に積極的に受験を勧めている。学校の成績の向上だけでなく、日々の学習の結果として英語力が向上したことを客観的に評価してくれるので、多くの生徒がより高い級の取得をめざして努力している。しかし、文部科学省の平成19年度の調査では、公立学校で「中学校3年生で英検3級程度以上の英語力を持つ生徒は全体の約32%、高等学校3年生で英検準2級程度以上の英語力を持つ生徒は全体の約30%」であると報告している。英検取得を目標としても、依然として生徒の英語力向上は難しいということがわかる。

学業成績とは指導要録に記載される各教科・科目の評定のことを言う。文部科学省（2012c）が定めている各教科・科目の評定の基準としている部分を以下に抜粋する。

[1] 各教科・科目の評定は、高等学校学習指導要領（平成21年文部科学省告示第34号）及び特別支援学校高等部学習指導要領（以下、「高等学校学習指導要領等」という。）に示す各教科・科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らし、その実現状況を総括的に評価して、「十分満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断されるものを5、「十分満足できる」状況と判断されるものを4、「おおむね満足できる」状況と判断されるものを3、「努力を要する」状況と判断されるものを2、「努力を要すると判断されるもののうち、特に程度が低い」状況と判断されるものを1のように区別して評価を記入する。

[2] 評定に当たっては、知識や技能のみの評価など一部の観点に偏した評定が行われることのないように、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」及び「知識・理解」といった観点による評価を十分踏まえながら評定を行っていくとともに、評定が教師の主観に流れて妥当性や信頼性等を欠くことのないよう学校として留意する。その際、別紙6に各教科の評定の観点及びその趣旨を示しているのので、これらを十分踏まえながらそれぞれの科目のねらいや特性を勘案して具体的な評価規準を設定するなど評価の在り方を工夫する。

[1] において、5段階評定の基準を大まかに説明しているが、この5段階評定の基準は学校間で格差がある。5段階評定の基準は各学校が生徒の実態に即して決定しているのので、学校という母集団の中でのみ適用する基準に基づき評価されている。そのため、模擬試験で使われる全国偏差値のように、客観的な指標になるとは言い難い。高等学校では評定1を取った場合、当該学年に留年するという規定を設けている学校が多数あるが、評定1の基準も学校によってばらつきがある。

[2] において、評定には『「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」及び「知識・理解」といった観点による評価』を含めることが求められている。つまり、定期考査試験や小テストの成績だけでなく、授業貢献度や課題提出などの努力点も評価に含めるということが明記されている。このことか

ら、評定とは客観的な学力ではなく、与えられた課題や目標に対してどの程度努力し、どの程度到達できたかを学習者に示すものであることがわかる。

別紙6(文部科学省, 2012d) に記されている外国語科の評価の観点とその趣旨を表1に抜粋する。

■表1：外国語科の評価の観点とその趣旨(文部科学省, 2012d)

観点	趣旨
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。
外国語表現の能力	外国語で話したり書いたりして、情報や考えなどを適切に伝えている。
外国語理解の能力	外国語を聞いたり読んだりして、情報や考えなどを的確に理解している。
言語や文化についての知識・理解	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けているとともに、その背景にある文化などを理解している。

高等学校では中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語など英語以外の外国語を履修することが可能である。しかし、本研究においては英語科の評価の観点とその趣旨を別紙6とする。改訂前の学習指導要領で定められている科目名を観点に当てはめると表2ようになる。

■表2：改訂前の評価の観点と該当科目

観点	該当する科目
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	オーラルコミュニケーションⅠ, Ⅱ
外国語表現の能力	英語Ⅰ, Ⅱ, ライティング
外国語理解の能力	英語Ⅰ, Ⅱ, リーディング
言語や文化についての知識・理解	オーラルコミュニケーションⅠ, Ⅱ, 英語Ⅰ, 英語Ⅱ

各科目が趣旨に基づき目標設定をし、学習者に評定を示している。評定とは5段階評定のことを言うが、本研究では100点満点で評価する評点を『学業成績』として使用することとする。

次に、「学力」という観点で客観的に英語の能力を評価するとき、多くの高校では外部試験を参考に

している。外部試験とは全国的に実施されている模擬試験や英検、GTEC、TOEICなどの資格試験のことを指す。また、大学入試センター試験(以下センター試験と記す)も客観的な学力の指標となる。センター試験(2009)は、「大学(短期大学を含む。以下同じ)に入学を志願する者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的」としているからである。

「学業成績」と「学力」の大きな違いは何かというと、「学業成績」は2~3か月間という短い期間の中で学習した範囲の到達度と努力を評価するものであるが、「学力」は評価の客観性と安定性を確保したテストを受けたときの成績のことを指す。模擬試験や英検やセンター試験は過去問題を一般に公表しており、テスト構成や難易度が大きく変わることはない。しかし、「学業成績」は生徒の実態に応じて担当教員がテスト構成や配点、難易度を変えることが可能である。そうすると科目担当の教員や入学してくる生徒が変わるたびに、テスト結果が異なってしまうので、客観的な評価とは言い難い。そのため、本研究における「学力」とは模擬試験の成績のことを指す。

高校入試や大学入試では受験生に個人の成績を公表することはまずない。しかし、センター試験だけは自己採点という形で各受験生が自分の得点を知ることができる。山西(2000)はセンター試験の結果と英検取得級の関連性を調査し、英検取得級が高いほど、センター試験結果は高得点となっていると報告している。また、授業で英検対策授業を取り入れていたり、授業内容が英検対策になっていたりする場合は、センター試験結果も高得点となっていると結論づけている。英語においては英検取得級とセンター試験結果の関連性が高いことを裏づけている。

高校生が客観的な学力を測定する学力試験として、ベネッセコーポレーションの進研模試がある。進研模試は、高校1年次に年3回、高校2年次に年4回、高校3年次に年6回実施され、「高校生の学力育成と進路選択を支援するため」に作られたテストである(ベネッセコーポレーション, 2012)。教科ごとに出題範囲も定められており、「時期に応じた内容・形式の出題や、安定した受験母集団で、全国レベルでの客観的な学習到達度が測定」(ベネッセコーポレーション)できるので、学力の伸長を測定するテストとして全国の高校で広く採用されてい

る。全国の高校生の中で自分の学力がどの程度なのかを全国偏差値で確かめられるので、客観的な評価として受験指導にも役立てられている。

本研究では、高校3年間の学業成績を「評点」、模擬試験の結果を「学力」、高校卒業時までに取得した英検最終取得級を「英語力」と定義して、これら3つの成績がどのように影響を与えているかを検証していく。

3 研究内容

3.1 研究目的

本研究は、高校3年間の英語の学業成績と模擬試験の成績を比較し、英検最終取得級がどちらの成績により良い影響を与えているかを調べることを目的としている。

高校3年間の学業成績は英語Ⅰ、オーラルコミュニケーションⅠ（1年）、英語Ⅱ、ライティング（2年）、リーディング、ライティング（3年）の学年末評価点を観測変数として使用する。また、客観的な学力を測定している成績として、各学年で3回から4回受験している模擬試験の全国偏差値（「学力」）の平均点を観測変数として使用する。各年度末に算出される英語科の評価点を「評点」と称し、模擬試験の成績を「学力」と称する。

英検の取得級は高校卒業時に取得した最終級を使用し、英検取得級なし（0）、3級（1）、準2級（2）、2級（3）の4つのクラスに分け、取得級別に「評点」と「学力」がどのように変化しているかを分析した。

また、英検が「評点」と「学力」にどの程度影響を与えているかを分析するために、共分散構造分析の手法を用いて、縦断的モデル、成長曲線モデル、潜在構造分析を行い、どのような生徒が「評点」と「学力」の両方で伸びているかを分析した。

以上の条件を踏まえて、次の仮説を設定した。

仮説：高校3年間で英検取得級が高くなるにつれて、「評点」と「学力」の両方が向上する。

3.2 実験参加者

私立高等学校2007年に入学した188名の生徒の成績をデータとして使用した。データには各学年の学年末評価点（100点満点）と模擬試験の全国偏差値、および英検取得級をそのまま利用した。

3.3 研究手順

仮説を検証するために、高校卒業時の英検最終取得級別に、各年度末の「評点」と「学力」のデータをMplusという統計ソフトを使って共分散構造分析を行った。分析に使用したMplusはMuthen and Muthen（1998）が開発したソフトウェアで、欠損値を扱うことができる。実験参加者の中には、留学していて2年次の評点がなかったり、欠席していて模擬試験の結果がなかった生徒もいたが、欠損値が扱えるおかげで多くのデータを扱うことができた。また、Mplusが他の統計ソフトウェアと異なる点は、より広範囲のモデルを扱うことができるという点である（豊田, 2007）。本研究で使用した潜在構造分析は他の統計ソフトウェアでは扱うことができないが、Mplusを扱うことで分析が可能となった。

4 実験結果

4.1 実験結果その1

高校3年2月末までの英検取得級別に1学年末、2学年末、3学年末の評点と学力の平均点および標準偏差を算出し、表3に示した。

■ 表3：英検取得級別評点の平均と標準偏差

英検取得級	n	1年		2年		3年	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
なし	16	54.9	11.9	53.8	13.5	57.8	10.7
3級	87	61.1	9.2	58.3	12.6	60.2	12.1
準2級	69	72.2	7.8	71.4	13.0	68.3	10.8
2級	16	79.9	8.6	83.5	7.3	81.2	8.7

次に、学力の平均点を表4に示す。

■ 表4：英検取得級別学力の平均と標準偏差

英検取得級	n	1年		2年		3年	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
なし	16	41.3	4.1	41.4	2.9	39.0	2.4
3級	87	44.2	4.0	44.3	5.6	42.0	5.0
準2級	69	48.7	4.3	48.2	4.3	47.2	4.4
2級	16	55.7	7.6	57.2	6.7	56.6	5.6

評点と同様、英検取得級が上がるごとに学力の平均点は高くなっている。

次に、英検取得級と評点と学力の相関を表5に示す。

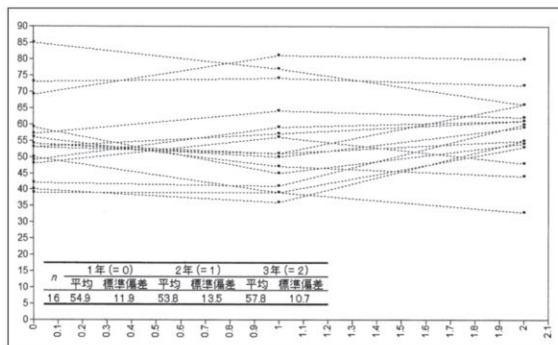
■表5：英検取得級、評点、学力の相関

	英検	1年 評点	2年 評点	3年 評点	1年 学力	2年 学力	3年 学力
英検	1.00						
1年評点	0.62	1.00					
2年評点	0.55	0.86	1.00				
3年評点	0.47	0.64	0.78	1.00			
1年学力	0.62	0.74	0.57	0.50	1.00		
2年学力	0.58	0.57	0.51	0.47	0.79	1.00	
3年学力	0.67	0.58	0.56	0.51	0.75	0.85	1.00

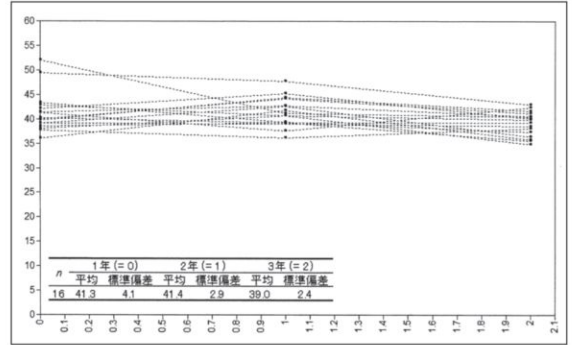
英検取得級が各学年の評点と学力にそれほど大きな相関があるとは思えない。評点は学年が上がるにつれて相関が低くなっている(0.62, 0.55, 0.47)。また、学力は高校3年次の相関が一番高い(0.67)が高校2年次(0.58)には高校1年次(0.62)よりも低くなっている。このことから、英検取得級が各学年の評点と学力に強い影響を与えているとは言い難いが、何らかの正の要因があることはわかる。

4.2 実験結果その2

次に、英検取得級別に入学時から卒業までの「評点」と「学力」の時系列的变化を図1から図8に示す。図1と図2から、英検取得級なしの生徒は、1年次の「評点」の成績に非常にばらつきがあることがわかる。一方、図2から「学力」の低い生徒が集まっていることがわかる。3年次は「評点」と「学力」の両方の成績が集約されほとんどばらつきがなくなっていることがわかる。

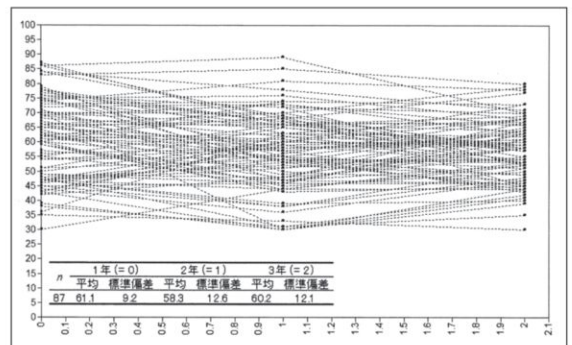


▶ 図1：英検取得級なしの評点時系列推移

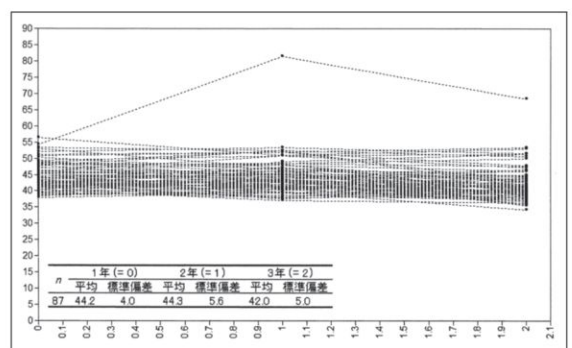


▶ 図2：英検取得級なしの学力時系列推移

図4から、英検3級取得者の中で、「学力」が飛び抜けて伸びた生徒が1名いることがわかる。しかし、「評点」(図3)ではそれほど大きく伸びた生徒がいるようには思えない。英検3級取得者の中には、資格取得よりも大学入試を第一に考えている生徒がおり、「評点」よりも「学力」の向上をめざして勉強している生徒がいることがこの図から読み取れる。



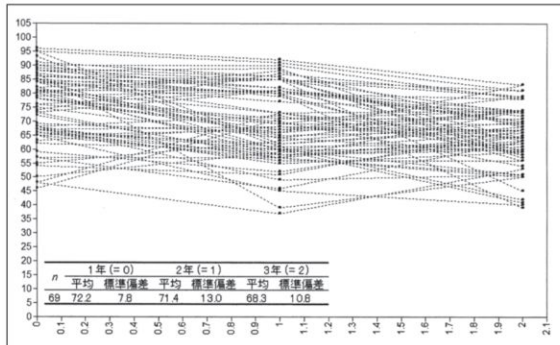
▶ 図3：英検3級取得者の評点時系列推移



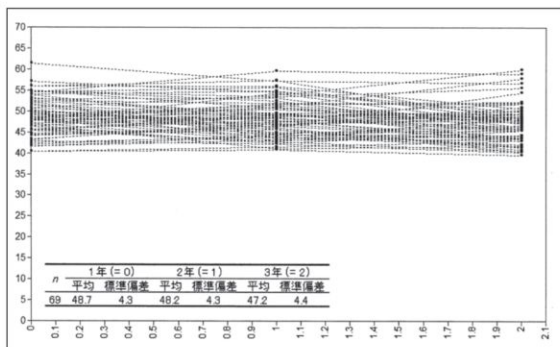
▶ 図4：英検3級取得者の学力時系列推移

図5と図6から、準2級取得者は「評点」と「学力」の両方で成績がほぼ横ばいになっていることがわかる。「評点」のばらつきの方が「学力」よりも大きいのも特徴である。「評点」で、全体的に2年

次の成績がやや下降気味であることも見て取れる。

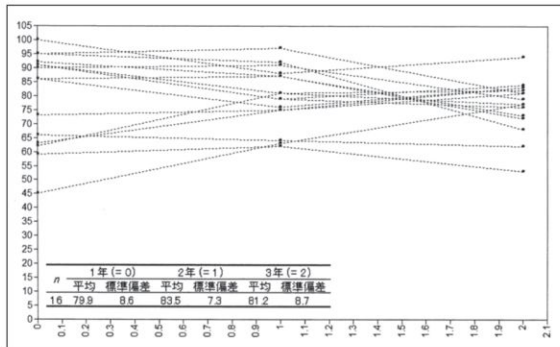


▶ 図 5：英検準 2 級取得者の評点時系列推移

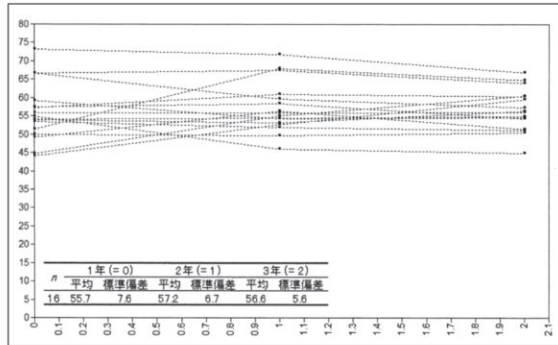


▶ 図 6：英検準 2 級取得者の学力時系列推移

図 7 と図 8 から、英検 2 級取得者は「評点」と「学力」の両方が 1 年次から高い生徒が集まっていることがわかる。「評点」と「学力」は、全体的に高校 2 年次に成績が高くなっていることがわかる。英検 2 級取得を考える時期が高校 2 年次から 3 年次なので、その時期に資格取得のための勉強を始める生徒が多くなるからだと推測できる。また、大学入試を意識し出すのもこの時期であるので、「評点」と「学力」の両方が伸びる時期と一致している。



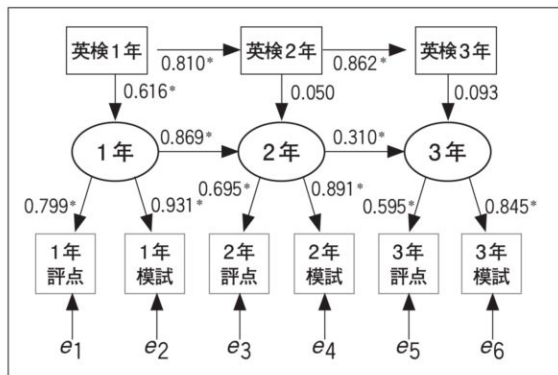
▶ 図 7：英検 2 級取得者の評点時系列推移



▶ 図 8：英検 2 級取得者の学力時系列推移

4.3 実験結果その 3

構造方程式モデリングの 1 つに、時間の経過に伴って構成概念が変化するモデルがある。「各時点で複数の測定がなされているモデルを縦断的モデルという」(豊田, 1998)。構成概念は測定時なので 3 つ (1 年次, 2 年次, 3 年次)、観測変数はそれぞれ 2 つ (評点と模試) なので全部で 6 つある。これに各年度末に取得した英検取得級を構成概念に影響を与えると仮定して構築したモデルが図 9 である。



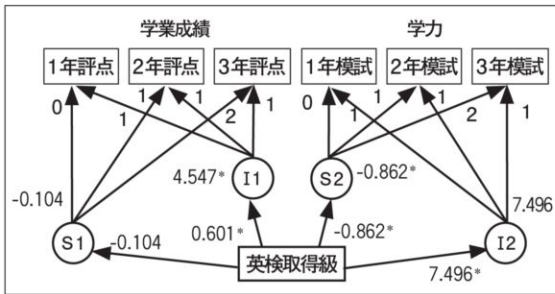
(注) * $p < .05$

▶ 図 9：縦断的モデル

1 年次と 2 年次の構成概念としての「英語力」が次年度にどの程度影響を与えているか、また英検取得級が当該学年の「英語力」にどの程度影響を与えているかがよくわかる。しかし、モデルの適合度があまりよくなく (CFI = 0.795, TLI = 0.680, RMSEA = 0.275, SRMR = 0.102)、英検取得級が各学年の英語力に貢献しているかを分析するにはあまり参考にならない。

4.4 実験結果その4

英検取得級が「評点」と「学力」にどの程度影響を与えるのかを検証するために、成長曲線モデル（または潜在曲線モデル）分析を行った。図10は成長曲線モデルのパス図を表している。しかし、モデルの適合度指標の値は、CFI=0.880, TLI=0.807, RMSA=0.204, SRMR=0.227となっており、モデルの適合度はあまり良くない。そのため、英検の取得級が「評点」と「学力」にそれほど影響を与えていないということが示唆される。

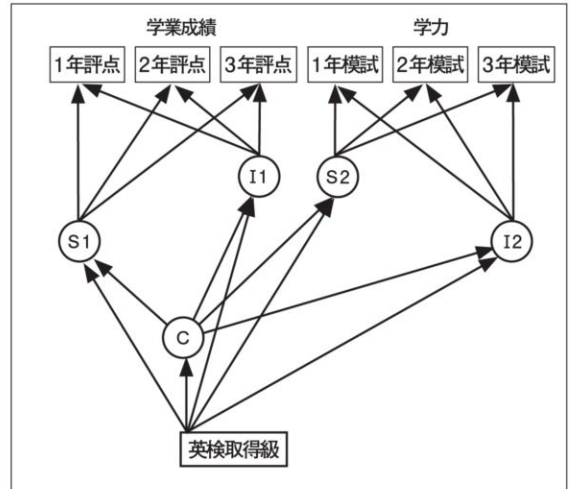


(注) * $p < .05$

▶ 図10：成長曲線モデル

4.5 実験結果その5

英検の取得級が与える影響とどのようなグループがより成績を伸ばしているかを分析するために、成長データに対する潜在構造分析を行った。英検取得級別に「評点」と「学力」がどのように変化しているかを分析した。英検取得級別に潜在クラスをそれぞれ、英検取得級なし、英検3級取得、英検準2級取得、英検2級取得の4つに分けた。しかし、適合度があまり良くないため、最終的に潜在クラスを2つに分けた。その結果、BICが7113.985、潜在クラスの質を分析するEntropyが0.982となったので、十分な適合を得られた。図11が潜在構造分析のパス図で、Mplusによる推定値を表6に示す。



▶ 図11：潜在構造分析のパス図

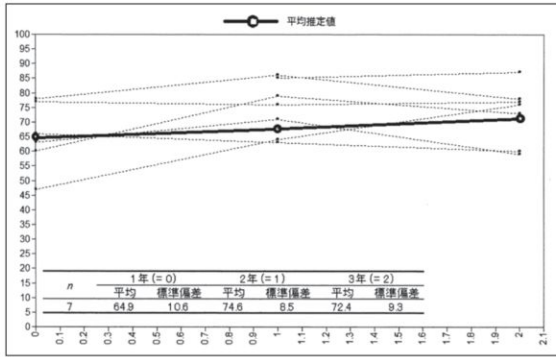
■ 表6：Mplusによる出力結果（標準化推定値）

Latent Class 1	Estimate	S.E.	Est./S.E.	Two-Tailed P-Value
Intercepts				
I1 (評点)	3.492	0.522	6.691	0.000*
S1 (評点)	0.661	0.565	1.171	0.241
I2 (学力)	6.231	0.839	7.427	0.000*
S2 (学力)	3.385	1.000	3.384	0.001*

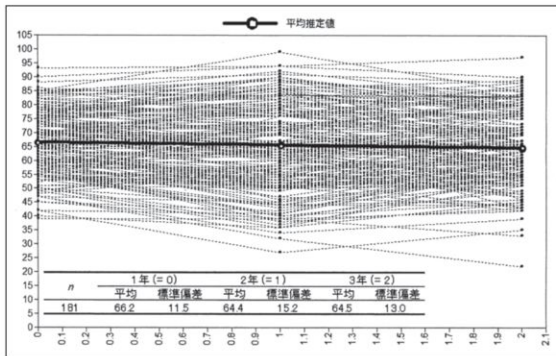
Latent Class 2	Estimate	S.E.	Est./S.E.	Two-Tailed P-Value
Intercepts				
I1 (評点)	4.219	0.221	19.095	0.000*
S1 (評点)	-0.058	0.128	-0.455	0.649
I2 (学力)	6.795	0.984	9.938	0.000*
S2 (学力)	-0.779	0.229	-3.398	0.001*

Categorical Latent Variables				
C#1 on eiken	1.218	0.608	2.003	0.045*
Intercepts C#1	-5.369	1.406	-3.818	0.000*

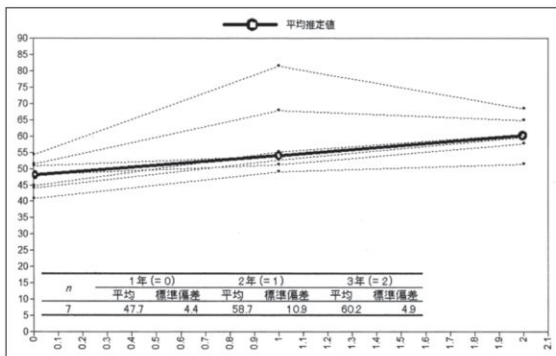
また、潜在クラス別の時系列変化を図12から図15に示す。



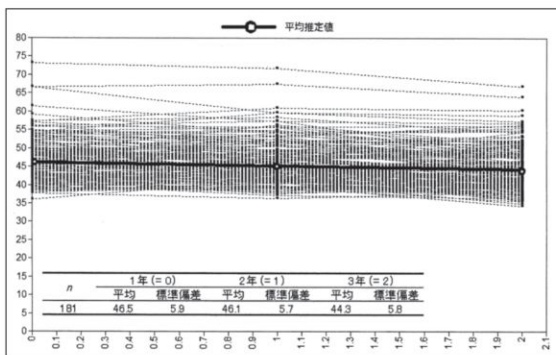
▶ 図12：潜在クラス1（評点の推移）



▶ 図13：潜在クラス2（評点の推移）



▶ 図14：潜在クラス1（学力の推移）



▶ 図15：潜在クラス2（学力の推移）

潜在クラスは英検による4つの級ではなく、時系列で成績が伸びているか横ばいになっているかの2

つに分かれている。潜在クラス1と潜在クラス2の英検取得級の人数と構成は表7のとおりである。

■ 表7：潜在クラスの構成

	Class 1	Class 2
なし	0	18
3級	2	84
準2級	2	67
2級	3	12
合計	7	181

5 考察

5.1 仮説の検証

本研究の目的は、高校3年間の英語の学業成績と模擬試験の成績を比較し、英検最終取得級がどちらの成績により良い影響を与えているかを調べることである。実験結果その1から英検最終取得級が高いほど、各学年の評点と模試の成績が高いことがわかる。しかし、この記述統計だけでは、生徒個人の成績の推移がわからない。例えば、1年次に英検2級を取得した生徒は、3年になるまでにさらに成績を伸ばしているのか。あるいは、入学時に英検3級から2級を取得した生徒は3年間で成績を伸ばしているのかなど、個人の成績の伸長を見ることができない。

記述統計だけを見て、英検2級取得者が3年間で成績を伸ばしているかはこの表3、表4、表5からはわからない。時系列的な成績の伸長は縦断的モデルや成長曲線モデルや潜在構造分析を行うことで、生徒個人の伸長や同じような推移を示しているグループを見つけ出すことができるのである。

5.2 縦断的モデルと成長曲線モデル

縦断的モデルでは各学年の英検取得級が当該学年の成績にどの程度影響を与えているかを時系列で分析することができる。残念ながら、モデルの適合度があまり良くなかったため、英検取得級が評点や模試に与える影響については明らかにならなかった。朝野・鈴木・小島（2005）は適合度の指標となるRMSEAやSRMRが0.1より大きい場合はモデルとして適していないと判断するよう助言している。

次に、共分散構造モデルの中で最近注目を集めて

いるのが成長曲線モデル、あるいは潜在曲線モデルと呼ばれているモデルである（豊田, 2007; 狩野・三浦, 2007; Byrne, 2012）。成長曲線モデルは、同じ対象者に測定する時期を複数回繰り返して行い、同じような成長をする個人をひとまとまりのグループにして、経年で成長や変化を分析していく手法である。本研究では、英検最終取得級によって「評点」と「学力」のどちらにより影響を与えているかを分析したが、残念ながらこのモデルも適合度があまり良くなかった。

これらのことから、縦断的モデルも成長曲線モデルも適したモデルではなかったため、英検取得級という因子によって「評点」や「学力」が変化しているとは考えにくいということがわかる。英検取得級が高くなるにつれて、「評点」や「学力」が伸長するとは言えないのだということがこの2つのモデルから明示された。

5.3 成長データに対する潜在構造分析

成長データに対する潜在構造分析は、成長データを用いて「評点」と「学力」が同じように変化しているグループ（潜在クラス）を見つけ出す解析手法である（豊田, 2000, 2007; Kaplan, 2009; Muthen, Khoo, Francis & Boscardin, 2003; Schumacker & Lomax, 2010）。

モデルの適合度から潜在クラスは2つに設定された。グループ1は英検取得級が高くなるにつれて「評点」と「学力」のそれぞれのグループ内の平均が1年時よりも向上したグループである。グループ2は英検取得級にかかわらず、「評点」と「学力」のそれぞれのグループ内の平均が1年時より下降したグループである。グループ1には7名の生徒がおり、この7名のうち6名はいずれも高校在学中に英検取得級が高くなった生徒である。

この7名の特徴は、大学入試を意識して英語の力をつけようと努力した生徒であり、英検取得にも力を入れた生徒たちである。表8は7名の生徒の英検取得級の推移と3年次の成績から1年次の成績を引いた得点差である。この表から、2名の生徒が評点において3年次に成績が下がった生徒がいることがわかるが、学力においては全員得点を上げている。英検取得級に関しては、入学前は英検を取得していなかった生徒が6名いて、全員1年次に3級を取得したことがわかる。また、3級、準2級、2級と学

年ごとに取得級を上げている生徒が2名いる。1年次に英検2級を取得した生徒は2年次、3年次にそれほど成績を伸ばさなかったが、潜在クラス1の生徒たちは、2年次から3年次に英検取得級を上げ、評点と模試の成績を上げていることが潜在構造分析からわかった。

もちろん、この7名以外にも英検取得級を高くした生徒は多数いる。しかし、「評点」と「学力」の両方が顕著に向上した生徒はいなかったということが判明した。どちらかの成績が向上したが、両方の力をつけるには偏った学習をしなないということが今回の研究から明らかになった。

■表8：英検取得級の推移と得点差

	入学前	1年	2年	3年	評点差	学力差
A	なし	3級	準2級	準2級	0	10
B	4級	3級	3級	3級	-6	14
C	なし	3級	準2級	2級	-4	16
D	なし	3級	3級	準2級	0	9
E	なし	3級	準2級	2級	13	16
F	なし	3級	2級	2級	2	13
G	なし	3級	3級	3級	29	11
					4.86	12.71

6 今後の展望

「評点」と「学力」の向上には、英検取得級はそれほど大きな影響を与えていないということが、今回の研究からわかった。英検2級取得者が大学入試で良い実績を上げているので、英語の勉強の仕方がわからない生徒に英検2級取得を進めているが、必ずしも英検取得級が英語の成績に強い影響を与えているとは限らない。

高校生に必要な英語力とは何か。山田（2006）は英語力をテストによって測ろうとするのは難しいと指摘している。しかし、文部科学省は英検準2級か2級に相当する能力が、高校卒業時において望ましい英語力であると目標を掲げている。英検2級取得や大学入試における結果はあくまでも日々の努力の積み重ねの結果である。「評点」は定期考査の素点だけでなく授業参加度や提出物等の努力点を評価しているため、「評点」と「学力」の両方が向上している生徒は高校の授業をよく理解し、学力も身につ

けているということになる。金谷 (2009) は高1からの基礎的な力を身につけて、徐々に入試に向けて意識づけをする計画を立てれば大学入試に必要な学力を身につけることができることを、文部科学省認定の教科書の内容を分析することによって証明している。

部活動に当てはめると、「評点」は日々の基礎トレーニングの達成度、「学力」は練習試合の結果となるのではないだろうか。毎日の地道な努力の結果を模擬試験で客観的に評価すれば、努力の過程と学力の両方が評価される。「評点」の中に模擬試験や英検等の外部試験を積極的に取り入れ、努力点と客観的な評価を生徒に示すようにすれば、「学力」の向

上にもつながるのではないだろうか。高校の現場で評価の在り方を見直し、高校3年間でどれだけ英語力が向上したかがわかるような評価を生徒に示す必要があるだろう。

謝 辞

本研究をこのような形で発表する機会を与えてくださった(財)日本英語検定協会と選考委員の先生方に心より感謝いたします。特に助言者の村木英治先生、さらに研究過程において的確なアドバイスと示唆をくださった関西大学の北村裕先生に厚く御礼申し上げます。

参考文献 (*は引用文献)

- * 朝野照彦・鈴木督久・小島隆矢.(2005).『入門共分散構造分析の実際』.東京:講談社.
- * ベネッセコーポレーション.(2012).『Benesse マナビジョン』. Retrieved April 22, 2012, from <http://manabi.benesse.ne.jp/assess/moshi/what/schedule/>
- * Byrne, B.M.(2012). *Structural equation modeling with Mplus: basic concepts, applications, and programming*. New York: Routledge.
- * 大学入試センター.(2009).『センター試験の概要』. 東京:大学入試センター.
- Jung, T. & Wickrama, K.A.S.(2008). An introduction to latent class growth analysis and growth mixture modeling. *Social and Personality Psychology Compass*, 2/1, 302-317.
- * 金谷憲編著.(2009).『教科書だけで大学入試突破できる』. 東京:大修館書店.
- * Kaplan, D.(2009). *Structural equation modeling: foundations and extensions*. London: SAGE Publications Ltd.
- * 狩野裕・三浦麻子.(2007).『グラフィカル多変量解析』. 京都:現代数学社.
- * 文部科学省.(2012a).『資料1『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』(抜粋). Retrieved April 17, 2010, from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/shiryo/attach/1301949.htm
- * 文部科学省.(2012b).『『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』について』. Retrieved April 17, 2012, from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/07/1308888.htm
- * 文部科学省.(2012c).『【別紙3】高等学校及び特別支援学校高等部の指導要録に記載する事項等』. Retrieved April 17, 2012, from http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/attach/1292903.htm
- * 文部科学省.(2012d).『【別紙6】各教科の評価の観点及びその趣旨(高等学校及び特別支援学校高等部)』. Retrieved April 17, 2012, from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/nc/_icsFiles/afieldfile/2010/05/13/1292899_2.pdf
- * Muthen, B., Khoo, S., Francis, D.J., & Boscardin, C.(2003). Analysis of reading skills development from kindergarten through first grade: an application of growth mixture modeling to sequential processes. In N. Duan & S. Reise(Eds.), *Multilevel modeling: methodological advances, issues and applications*(pp.62-77). Mahwah: Lawrence Erlbaum Associate, Inc., Publishers.
- * Muthen, L.K., & Muthen, B.O.(1998). *Mplus User's Guide*. Los Angeles, CA: Muthen & Muthen.
- * 日本英語検定協会.(2012).『英検とは』. Retrieved, April 17, 2012, from <http://www.eiken.or.jp/about/about.html>
- * Schumacker, R.E. & Lomax, R. G.(2010). *A beginner's guide to structural equation modeling*. New York: Routledge.
- * 豊田秀樹.(1998).『共分散構造分析[入門編]—構造方程式モデリング—』. 東京:朝倉書店.
- * 豊田秀樹.(2000).『共分散構造分析[応用編]—構造方程式モデリング—』. 東京:朝倉書店.
- * 豊田秀樹.(2007).『共分散構造分析[AMOS編]—構造方程式モデリング—』. 東京:東京図書.
- * 山田雄一郎.(2006).『英語力とは何か』. 東京:大修館書店.
- * 山西敏博.(2000).『英検取得級と大学入試センター試験英語科目の点数との相関関係』. *STEP BULLETIN*, vol.13, 26-42.